

# 子どもの生活に密着した音楽表現

## Musical Expression Closely Related to the Life of Children

高 奈奈

### 要旨

本稿では、乳幼児期の音や声との関わりを述べ、子どもが思ったことや感じたことをうまく表現するためにはどのような環境を設定するべきか考える。子どもが自分の想いを音や声に乗せて表現することは、ごく自然なことであり、生活の中に溢れている。また、わが国で200年以上も前から子どもたちの間で親しまれてきた「わらべうた」の特徴を述べ、わらべうたが子どもの成長にもたらす影響について考察した。

キーワード：音楽表現 声 わらべうた

### はじめに

人間は、母親のお腹から外の世界に誕生したときに呼吸と共に産声として初めて声を出す。以後、生涯において笑い声、泣き声、話し声、歌声など様々な声を発すると同時に、音を聴く。聴覚は母体にいる時から発達し、胎児26週頃に音を感じるようになる。子どもにとって一番親密な母親の声や心臓の音、周りの大人の声、雨などの自然の音、金属や木、プラスチックなど様々な素材の音、楽器の音など子どもを取り巻く音を「聴くこと」により、音への関心が高まるのだ。

赤ちゃんは全ての音を聴き、自分の好きな音、安心する音、心地よい音、刺激のある音、悲しくなる音、不快な音を選別していく。そして、「聴くこと」によって取り入れた音を今度は言葉や歌として発する。「聴くこと」と「発する」ことを繰り返し、次第に自分の想いを言葉で伝えたり、気持ちを音によって表現できたりするようになる。

## 1. 乳幼児期における音楽表現

### (1) 赤ちゃんを取り巻く音と声

赤ちゃんは生後すぐに産声を発し、生後2ヶ月頃までは呼吸に伴った発声を行う。「ソーソー」とほとんどがいきんだ発声であるが、お腹が空いたとき、眠いとき、嬉しいとき、抱っこして欲しいときなど場面ごとに声の長さや高さが異なる。新生児期より、自分の欲求を声にして表現することができるのである。生後3ヶ月頃から、「アーアー」「ウーウー」と明瞭な母音を発声したり、あやすと「キャキャキャ」と声を出して笑うようになったりする。また、おもちゃのガラガラの音や「チリンチリン」という鈴の音に興味を示すようになり、音との関わりが広がる。5ヶ月頃になると、母音と子音を組み合わせながら、「アブアブアブ」と発声で

きるようになり、これが喃語である。そして、多くの赤ちゃんが1歳頃になると、「ママ」「パパ」「マンマ」「ワンワン」「ニャーニャー」など意味のある言葉を発するようになり、様々な単語を習得していく。

発声や発後の発達には、周囲の大人の言葉がけや声、赤ちゃんを取り巻く音の環境が大きく影響を与える。生後間もない赤ちゃんが「ウーウーウー」と声を出した際に、親密な関係を持つ大人が「そうなの。お腹がすいたのね。」などと優しい声で歌うように抑揚をつけて応えることにより、赤ちゃんとの基本的な信頼関係を築くことができる。声のやりとりによって、心の安定が得られるのだ。特に母親の声や心音は、赤ちゃんにとって最も安心できるものである。また、模倣することはコミュニケーションにつながる。赤ちゃんが、「アブアブアブ」と発声したのに対し、大人も同じように「アブアブアブ」と繰り返して模倣することが表現の受容となる。

赤ちゃんは大人と違い、聴き取る音を選ぶことができない。赤ちゃんは、家庭や保育の場面において、不快な音や乱暴な言葉が飛び交う環境に置かれると、その全ての音を耳と心で聴き取り、吸収することになる。生涯にわたり言葉や音によって気持ちや感じたことをうまく表現するためには、美しい言葉や音を聴くことが不可欠である。乳幼児期に適切な言葉や音に囲まれて育つことで、表現力が発達する。

## (2) 言葉とリズム

1歳を過ぎた頃から様々な言葉を発するようになるが、3歳頃になるまでは明瞭に発話することが難しい。発話し始めた頃は、リズムで言葉を捉えようとする。2歳の男の子A君が電車のおもちゃを指差して、「トントンキー」と言うようになった。母親は何のことを言っているのか分からなかったが、ある日テレビに映る特急電車を指差して「トントンキートントンキー」と言ったことでA君が何を言いたいのか気づいたのだ。「トントンキー」は、「ちょうとっきゅう（超特急）」のことであった。母親が、電車のおもちゃを「ちょうとっきゅう」と言ったりリズムを聴きとり、同じリズムの中でA君が発話できる「ト」と「ン」と「キ」を使って「トントンキー」と表現したのだ。

3歳の男の子B君は「スコップ」のことを「スポック」と言うが、これも言葉をリズムで捉えている。促音と破裂音とリズムをしっかりと聴き取り、自分が発話しやすい「スポック」と表現している。また、3歳の男の子C君は「ポップコーン」のことを「コップポーン」と発話する。「ポップ」は、破裂音+促音+破裂音であるため、幼児にとって正しく発語するのは難しいため、C君は単語のリズムを聴き取り、発語している。

これらの事例のように、乳幼児期は言葉をリズムで捉えて発語する場面が多く見られる。まだ発音できない子音や母音と子音の組み合わせがあっても、リズムと共に言葉を習得し、表現していくことができるのである。リズムを模倣して発語することの楽しみを感じながら何度も繰り返す内に、正しく発語できるようになる。

## (3) 生活の中に音が溢れる乳幼児期

子どもの生活の中には音が溢れており、子どもたちはそれらを素直に表現することができる。子どもは様々な事象を音で表現する能力に長けている。風の音が聞こえた時、「ザザザザザー風さん怒っているのかな?」「ピューピュー風さん歌っているみたいだね。」などと風の音を擬

音語で表現し、風を擬人化して想像力を働かせることができる。

また、思ったことや感じたことを即興で歌にして表現する場面が多く見られる。2歳の男子D君は、自分の身の回りのことを一人でできるようになったことが嬉しくて、「○○くんは～一人でも～できるんだぁ～」と自作のメロディーに乗せて自立の喜びを歌う。3歳の女の子Aちゃんは、横断歩道を走って渡ったことを母親に注意された後、譜例1のような歌を歌いながら、大股でドシドシと歩いていた。母親の注意を素直に受け入れるのは気が進まないが、きちんと理解していることを主張しているような歌である。3歳の女の子Cちゃんは、おやつが自分の大好きなビスケットであると知ったとき嬉しくて思わず譜例2のような歌を歌いながら、スキップをしていた。子どもは、気持ちを歌にしようと考えて歌っているのではなく、心の中に溢れる感情が自然と歌や音楽として表現される。

#### 譜例1



#### 譜例2



## 2. わらべうたと子ども

### (1) わらべうたとは

前述にもあるように、子どもは思いや感じたことを表す際、自然と音や歌で表現することが多く見られる。それらが発展し、子どもの歌のひとつとして形式が確立したのが「わらべうた」である。「わらべうた」とは、はっきりとした楽譜や作曲者は存在せず、家族や地域社会の中で人から人へ伝承されてきた歌のことである。現代の日本は核家族世帯や単独世帯が増加し、親子3世代でひとつ屋根の下生活することが少なくなっている。高度経済成長期以前の日本では、子どもは祖父母と生活を共にし、その関わりの中で様々なことを習得していた。わらべうたもそのひとつである。祖父母だけでなく、地域の人々との交流を通してわらべうたは後世に伝えられてきた。遊び歌を中心に子どもの生活に密着した内容が多く、日本固有の5音音階（陽音階：ドレミソラ、陰音階：ミファラシド）でできている。

### (2) 発話力を育てるわらべうたの役割

前述にもあるように、わらべうたは子どもの生活に密着した内容のものが多い。子どもが数を数える際、譜例3のようなメロディーになることが多いが、これもわらべうた的である。

譜例 3

い(1)ち(2)に(3)い(4)さん(5)しい(6)ご(7)お(8)ろく(7)しち(8)はち(8)

わらべうたは、2～3音でメロディーが構成されることが多く、数を数える際も例外ではない。ラ音とソ音の組み合わせによってできたメロディーは、頻繁に人々の生活を音で表現する際に用いられており、心地よく耳と心に響くのである。

譜例4は、天気予報の歌であるがこれも全音程の2音でメロディーが構成されている。「あーした天気になあれ」と歌いながら靴（このわらべうたができた当時は雪駄のようなものであったと推測される）を飛ばして、靴が表を向いたら晴れ、裏を向いたら雨、横向きに立ったら曇りというように、一種の占いのような遊びである。近年、気象予報はテレビやインターネットを通じて簡単に知ることができるが、まだそれらが普及していない時代では、空を見上げながら友達や家族と歌い、明日への希望を胸に膨らませていたに違いない。「なあれ」の部分に付点のリズムが見られることから人々の明るい期待感が伺える。

譜例 4

あ(あ)したてん(あ)きに(あ)な(あ)あれ

譜例5・譜例6は、お名前呼び歌である。友達を遊びに誘う際、家の玄関で譜例3のように歌いながら名前を呼ぶ。この歌をきっかけにして、誘う側の子どもは楽にコミュニケーションをとることができるし、誘われた側の子どもはとても嬉しい気持ちで誘いを受け入れることができる。

譜例 5

○(あ)○(あ)○(あ)○(あ)くん(あ)あ(あ)そ(あ)ぼ(あ)

譜例 6

○(あ)○(あ)ちゃん(あ)あ(あ)そ(あ)び(あ)ま(あ)し(あ)よ(あ)

乳幼児期の子どもが「ごめんね。」を言う際に譜例7のようなメロディーになることがある。語彙力が未熟で自分の気持ちをうまく伝えられない子どもにとっては、メロディーに言葉を乗せることによりスムーズに想いを伝えられる。また、許す側もリズムとメロディーに乗って「いいよ。」と言うことができる。

譜例 7



わらべうたは、語彙力が未熟な子どもにとって、自分の想いをスムーズに伝えられるコミュニケーション手段となるのだ。メロディーに乗せて自分の「声」を発することにより処理しきれない感情を発散したり、自分の言葉を体の外側で確認したりすることができる。

(3) 遊びをとまなうわらべうた

遊びをとまなうわらべうたは実に多種多様であり、日本全国に伝わるもの、地域限定で伝わるものがある。中には江戸時代から現代まで 200 年以上もの長い時間をかけて連綿と歌い継がれてきたわらべうたも存在する。人から人へと口づたいに伝承されてきたうたが多いため、歌詞の意味や内容があやふやなものも多く見られる。また、メロディーや遊び方も地域や家庭によって違いがあり、多種多様である。

遊びをとまなうわらべうたは、一人で遊ぶうた、二人で遊ぶうた、集団で遊ぶうたがある。譜例 8 は、一人で遊ぶ手遊びうたのひとつ「ちゃちゃつぽ」である。メロディーが「ラ」と「ソ」で構成された単純なうたで、すぐに歌うことができる。遊び方は、片方の手を握り、それを茶壺に見立てる。もう片方の手を広げて、歌に合わせて茶壺の底にしたり蓋にしたりする。右手と左手の茶壺と底・蓋の役割を入れ替えながら動作を繰り返し、最後に蓋にできたら手遊びの成功である。単純な遊びであるが、実際にやってみると意外に難しく、集中力が必要である。保育の中では、スピードを変えて行うとより子どもたちが夢中になって遊ぶことができる。

譜例 8



譜例 9 も一人で遊ぶ遊びうた「あんた方どこさ」である。1930年代より、関東地方・中部地方・近畿地方を中心に全国で歌われてきた。歌に合わせてゴム毬をつく手毬歌であるが、付点のリズムの連続と歌詞の「一さ」という終助詞が軽やかさを表現しており、ゴム毬をつくのに最適の歌である。軽快な曲調と歌詞によって、90年間もの間人々に好まれ、親しまれてきたと考えられる。一番多く普及している歌詞は譜例 9 の通りであるが、各地域によってはそれぞれの土地の風土や文化に合わせて歌詞が変えられている場合もある。歌の舞台となっている熊本県では、9～16小節は「船場川には 海老がおってさ それを漁師が 網さで取ってさ」と歌われている。また、地方によっては、「一さ」という終助詞の部分で、足をゴム毬とつき手の間をくぐらせたり、最後の「ちょっとかぶせ」の部分でゴム毬をスカートの中に隠したりしている。途中で 4 分の 3 拍子になったり、中間部は弱起になったりと変化に富んでおり、飽きる

ことなく毬つきを楽しむことができるわらべうたである。

譜例 9

あ ん た が た ど こ さ ひ ご さ ひ ご ど こ さ  
く ま も と さ く ま も と ど こ さ せん ば さ  
せ ん ば や ま に は た め き が お つ て さ  
そ れ を り ょ う し が て っ ぽ う で う つ て さ  
に て さ や い て さ く つ て さ そ れ を  
こ の は で ち ょ っ と か く せ

譜例10は、2人で遊ぶわらうた「おちゃらかほい」である。遊び方は、二人で向かい合って手を繋ぎ、歌を歌う前に「セッセッセーのヨイヨイヨイ」と掛け声をかける。「セッセッセーの」の時に手を繋いだまま下に3回腕を振り、「ヨイヨイヨイ」の時に手を交差させて手首を打ち合わせる。歌が始まると、「おちゃ」で自分の手の左手の平を叩き、「らか」で相手の左手の平を叩く。それを3回繰り返し、「ほい」でじゃんけんをする。勝った場合は万歳、負けた場合は目に手を当て泣くまね、あいこの場合は腰に手を当てる。付点のリズムと「おちゃらか」という言葉の響きが面白く、いつまでもじゃんけんの勝負を続けたいようなわらべうたである。「おいちゃらか」という言葉は、「お洒落」が訛って「おちゃらか」になったと伝えられているが、わらべうた故に確証があるわけではない。また、このわらべうたは江戸時代の遊郭において遊女や客が歌っていたものが起源であるという説があるが、これについても確かな研究結果は得られていない。

譜例10

お ち ら か お ち ら か お ち ら か ほ い お ち ら か か つ た よ お ち ら か ほ い

譜例11は、集団で遊ぶわらべうたのひとつである「なべなべそこぬけ」である。二人でも遊ぶことができるが、集団で遊ぶことにより遊びの面白さが深まる。二人での遊び方は、向かい合って手を繋ぎ「なべなべそこぬけ そこがぬけたら」の部分は左右に腕を振る。「かえりましょ」の部分で繋いだ手を離さないようにして向かい合った状態から、背中合わせの状態になる。2番も同じように腕を左右に振り、「もどりましょ」の部分で元の向かい合った状態に戻る。集団で遊ぶときは手を繋いで輪になり、1～3小節は腕を振る。4小節目の「かえりましょ」の部分で輪の一部の二人がアーチを作り、その他の人がそのアーチの中に入っていき、中心に背を向けた状態の輪を作る。「もどりましょ」では、二人で遊ぶ場合と同様に元の状態に戻る。

集団で遊ぶわらべうたは、他者と協力したり工夫したりしながら遊びを進めることができる。単純なメロディーやリズムが遊びを先導してくれるため、誰でも簡単に遊びに参加することができ、みんなで楽しむことができる。

#### 譜例11

な べ な べ そ こ ぬ け そ こ が ぬ け た ら か え り ま し ょ  
 な べ な べ そ こ ぬ け そ こ が ぬ け た ら も ど り ま し ょ

集団で遊ぶわらべうたの中には、2つの組に分かれて遊ぶ子取り遊びがあるが、その中でも「花いちもんめ」が全国的に最もよく知られている。歌詞と遊び方は以下の通りである。

2つの組に分かれて、それぞれ手を繋いで横一列に並び、対峙する。A組は1節目を歌いながら前に前進し、その際B組は後ずさりする。その動きを交互に行い繰り返すが、節の最後に足をあげて蹴るような動作を行う。

A：勝ってうれしい はないちもんめ

B：負けてくやしい はないちもんめ

A：あのこが欲しい

B：あの子じゃ分からん

A：この子が欲しい

B：この子じゃ分からん

A：相談しよう

B：そうしよう

(それぞれの組の子どもたちが集まって、小声で相談し、決まったら「きーまった。」と大きな声で言う。)

A：〇〇ちゃんが欲しい

B：〇〇ちゃんが欲しい

指名された子ども同士でじゃんけんをして、負けた側は相手側の組に取られることになる。どちらかの組が一人もいなくなったら遊びは終了する。

この遊びの最大の面白さは、グループで一致団結して勝負するというところにある。ただ勝負するだけでなく、歌を歌いながらやりとりすることにより、友好的に勝ち負けを決めるこ

とができる。また、指名されることへの期待感を持てる遊びでもある。最終的にはどちらかの組の全員を指名しなければ勝敗がつかないため、指名されない子どもが出にくく「なべなべそこぬけ」同様、安心して全員が参加でき、遊びを積極的に楽しむことができるであろう。

#### (4) わらべうたが担う役割

わらべうたは、メロディー・リズム・歌詞・動きが一体となり、子どもを遊びの世界へと誘導する力があると考えられる。それぞれの要素が単純で容易なものが多いため、苦手意識を持つことなく、遊ぶことができる。歌うことが苦手な子どもでも、わらべうたのメロディーはほとんどが2音か3音で構成されており、複雑なリズムもないため、すぐに歌えるようになる。目に見えるような成功や失敗が存在しないため、誰でも気軽に安心して繰り返し何度でも遊びたくなるような内容ばかりである。

近年、ICT化により人と人との関わりが希薄になりつつあり、コミュニケーション能力が低下している。家庭や地域での子育てや保育の場面においてわらべうたを取り入れることにより、子ども同士が遊びをともなう音楽を通じて、メロディーとリズムに乗ることの心地よさ、メロディーに乗せて言葉を表現することの喜び、音と声と体が連動することの爽快感などを感じることができる。これらは、言葉のみの遊び、体を動かす遊びだけでは感じることはできない、音楽表現遊び独自の事柄である。また、世代を越えて楽しめる内容が多く、世代間の交流を深めることができる。

元々楽譜が存在し、形がはっきりとしている童謡などとは違い、ピアノなどの楽器を用いることはなく、特別な練習も必要ない。母親や保育者が気軽に子育てや保育に取り入れることができるのもわらべうたの大きな利点である。近年、子どものための歌に複雑なリズムやメロディーが取り入れられ、芸術性やエンターテインメント性、メッセージ性が強い作品が多く見られる。鑑賞することで美しさや面白さなどを感じ、感性を育てることはできるが、乳幼児が自分の声や音で表現するには難しさがある。わらべうたを通じて、無理のない自然な表現を楽しみ、生涯にわたり自分の声と音で表現する力を身に付けて欲しい。

#### おわりに

保育の現場では、しばしば「音楽表現」の活動を難しく考えてしまう傾向がある。難しい伴奏を弾かなくてはいけない、正しい音程で歌わなくてはいけない、様々なリズムで表現遊びをしなくてはいけない、という風に自由な発想で表現できていない場合が多くみられる。芸術性の高い音楽や技巧的な音楽を聴いたり、様々な音楽の音色に触れたりすることにより、子どもの耳と心に様々な音楽が蓄積されていくため、乳幼児期に色とりどりの音を「聴くこと」は重要である。

しかし、「表現すること」は「聴くこと」よりも単純で良い。まずは自分の声で表現することが大切である。そして、子どもの生活に密着した事象（人の声、自然、動物など）をきっかけにして様々な表現を楽しむことで、生涯にわたり音楽に親しむことができるようになる。これらの表現活動の中で、美しさを感じたり、自分の想いを伝えたり、他者と心を通わせたりすることで、豊かな感性が磨かれていく。



#### 参考文献

- 梅本堯夫「子どもと音楽」東京大学出版会 2003
- 上笙一郎「日本童謡事典」東京堂出版 2005
- 小西行郎・志村洋子・今川恭子・坂井康子「乳幼児の音楽表現」中央法規出版 2016
- 三森桂子・小島エマ「<新版>実践保育内容シリーズ5 音楽表現」一藝社 2018
- 山下薫子「平成29年度小学校新学習指導要領ポイント総整理」東洋館出版 2017
- 小島律子「生活と文化をつなぐ「郷土の音楽」の教材開発と実践」黎明書房 2018